

係で、近衛天皇久安三年四月七日天台の僧綱が、白山を末寺に列するの勅許を請うた時、延議直に裁許を興へなかつたが、遂に如何ともするを得なかつたと見えて、五月四日に至り覺宗入滅の時を期して許可すべきを約せられた。この事は百鍊抄に載せられてゐる。思ふに覺宗は奏請の事に當つた僧綱であつたから、朝廷はこの條件を附したものと見える。然るに仁平二年九月覺宗示寂したから、白山はこの時山門の末院となつたと認むべきものである。但し近代の長吏白光院は眞言宗に屬してゐた。↓ビヤクウイン 白光院。

(十四)所屬寺院—本宮又は中宮に屬する寺院に白山五院、中宮八院・三箇寺などがあつた。それらに就いては各その項に記する。

**シラヤマヒメジンジャソウシヨ** 白山比咩神社叢書 同神社所藏の文獻一切を集めて活版に附したもので、第一輯白山記攷證、第二輯長吏舊記、第三輯白山比咩神社文書、第四輯秘籍集、第五輯白山神社考、第六輯執奏家並舊藩文書、第七輯長吏神主記録、第八輯營繕篇と成つて居る。宮司高原美忠の大正中に編する所である。

**シラヤマヒメジンジャモンシヨ** 白山比咩神社文書 一冊。同神社所藏の文書類一切を年代の順序に集めたもので、大正十三年十二月宮司高原美忠の整理に係り、白山比咩神社叢書第三輯として活版に附せられて居る。文書の最も古いものは建保四年のがあり、新しいのは文久年間のもある。尙この神社の文書には叢書第六輯の執奏家並舊藩文書と第七輯の長吏神主記録とがある。

**シラヤマヒヤクシユ** 志長山百首 一冊。文政十年江沼郡那谷寺の僧弗隱著。白山を詠じた歌百首、及び四季の雜歌七十五首を集めたものである。跋に文政十三年歲次庚寅三月法嗣戒光僧壽撰とある。

**シラヤマヒヤクシユ** 白山百首 金澤の人高林景寛の著である。著作年月は明らかでないが、明治五年以後のものである。

**シラヤマフクコキ** 白山復古記 一冊。森田平次著。明治五年舊幕府領白山山麓の十八ヶ村所屬に關する石川縣と足羽縣との交渉に起り、同年太政官の命により、凡べて加賀能美郡に附けられ、七年石川縣官が登嶺して佛體を下せしめたことが記してある。

**シラヤマフルミヤ** 白山古宮 往古の白山比咩神社の所在で、石川郡白山村地内に屬し、手取川安久壽が淵の上にある。文明十二年十月十六日戊刻炎上して、神靈を三宮に奉遷し、爾後その儘になつた。古宮の敷地は初め廣大であつたが、洪水毎に決潰して、今僅かに七百二十歩を遺してゐるに過ぎぬ。檜の古木が残つて居たから、この地を檜の森ともいうた。

**シラヤマベツクウジンジャ** 白山別宮神社 ↓ベツクウ 別宮。

**シラヤマホウノウシユウ** 白山奉納集 阿誰軒俳諧書籍目録に、『白山奉納集、二冊、伊勢住慶彦(彦)神主、同(延寶六年)九月日』と載せられるが、現物は未だ發見せられぬ。度會慶彦は白根集に見え、その白山宮に詣でたであらうことは、草庵集に『春やむかし石川郡さらよし野に分入て、花に來てこゝもことさらよしの哉 慶彦』とあるによつて知られる。元祿五年句空の著なる柞原集の序に、『ふ

りにし奉納集のしる(りカ)へにまた四卷をつぐ』といふのは、この白山奉納集のことであらう。

**シラヤママガラタチコウ** 白山眞柄太刀考 一冊。文政八年富田景周著。白山比咩神社に眞柄十郎左衛門が奉納した大太刀の來歴を考證したものである。

**シラヤママンク** 白山萬句 慶長元年前田利家は白山比咩神社の堂宇を造營したが、之に先だち藩士北村三郎右衛門宗甫は、白山神が千句の連歌を求め給ふ願告を得た。後遅々して行はれなかつたが、同十年より十二年に至る間に宗甫は應栖久左衛門明宗と謀り、百韻十卷を撰和し、之に五百二人の名を列して獻つた。今その序文の外九帖を存する。

**シラヤママンダラ** 白山曼陀羅 能美郡宮竹なる木津氏の所有で、長さ二米・幅一米の三幅對に、白山の地名等を細記したもので、里人は之を白山曼陀羅と言つてゐる。裏書に、『寛政元年己酉秋九月穀旦。加賀國金澤府下之匠司清水治左衛門尉峰充奉納之。芸臺楠肇敬書。』とある。もと白山本宮長吏の藏する所であつたのであらう。

**シラヤマミチ** 白山路 三宮古記文保三年に白山路と見え、大乘寺藏貞和二年寄進狀に白山大道と見える。石川郡野々市・鶴來・白山の路線をいふのであらう。

**シラヤマミヤジリ** 白山宮尻 手取川安久壽淵の上なる石川郡白山比咩神社舊社地の尻地を宮尻というた。白山宮莊嚴講中記録に、『延文元年丙申三月十九日、依大洪水一宮尻ノ路崩失。平等寺並市ノ在家皆流レ失。仍爲一往行一舟岡山ノ麓ニ新路ヲ付ラル。』また貞治

二年五月廿一日の條下に、『同宿以下帶甲胃。宮尻ノ坂口マテ令發向。』ともある。その宮尻にある村落を白山宮尻村というて、元和五年正月廿八日の書簡にも見えるが、後には單に白山村となり、元祿十四年の郷村名義抄に『石川郡白山村領之内に往昔下白山之社有之。故に村名に成由申傳。』といふやうになつた。

**シラヤマミヨウリゴンゲン** 白山妙理權現 白山嶺上の神靈は白山比咩神であるが、兩部神道から白山妙理權現と呼ぶこともある。源平盛衰記に『白山妙理權現は、日本無雙の靈峰にて、朝家唯一の神明なり。』といふもの、即ち是である。

**シラヤマミヨウリダイホサツ** 白山妙理大菩薩 白山の嶺上に鎮座する神靈を、佛徒は白山妙理大菩薩ともいうた。白山記に『其山頂名禪定。住有德大明神。即號正一位白山妙理大菩薩。』とある。

**シラヤマモリベケイス** 白山守部系圖 一卷。白山尾添口檜新宮の神主守部氏の系圖で、原本は尾添村に傳へられる、この系圖に鎌足から書いてゐるのは信じられない。白山記に守部氏は虫丸の末孫とある。

**シラヤマモンドウ** 白山問答 一冊。白山長吏澄意著。白山嶺上の神祠及び白山比咩神社の古事古傳を問答體に書いたもの。貞享五年と元祿十六年の自記である。

**シラヤマユウキ** 白山遊記 明治廿一年に著者今川以昌が、五人の同行者と共に、市瀬口から白山に登攀して、同じ市瀬口へ降下した記事に過ぎぬが、白山に關する古來の文學を廣く網羅し、地質・生物等も親切に紹介せられてゐる。序文の花王堂主人は醫師太田美